

石切場を発掘する

荒島石、来待石、福光石……。

島根県には、大きな石で造られた、たくさんのオブジェやモニュメントがあります。機械のない時代、これらはいつの間どのようして造られたか、そして運ばれたのでしょうか。そこには先人たちのさまざまな技術や知恵があったのでしようか……。
ここでは、発掘調査によって姿を現した出雲市の大井谷石切場跡や、現在でも採石が行われている八束郡吉道町の来待石石切場にスポットを当て、石工の技に迫ってみることにしましょう。

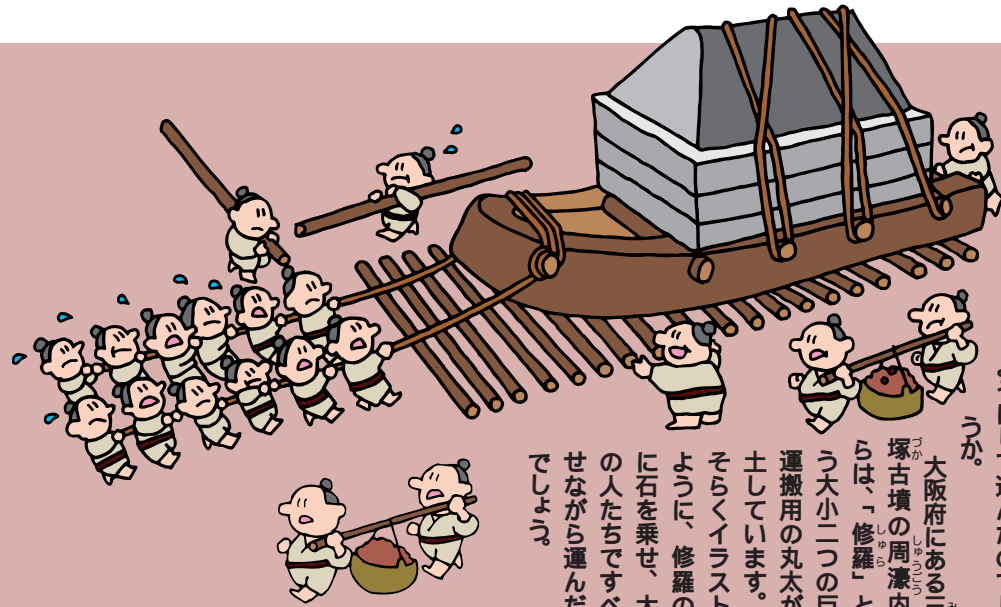


姿を現した石切場（大井谷石切場・出雲市上塩冶町：江戸時代後期～明治時代）

石を運ぶ

陸 現在では道路が整備され、採石場から加工場まで運搬車で原石を運べるようになりましたが、昭和四〇年代までは、ネコゲルマ、オイコ、ホソリ、大八車などを使って原石を運んでいました。さらに以前は「もっ」「ま差し担ぎ」したり、重いものは四人担ぎしていました。

さらにこれよりずっと以前、こうした道具のなかった古墳時代、古代人たちは、何トンもある石室の石をどのようにして運んだのでしょうか。



石を運ぶ様子（古墳時代：想像図）

大阪府にある三ツ塚古墳の周溝内からは、「修羅」という大小二つの巨石運搬用の丸太が出土しています。おそらくイラストのように、修羅の上に石を乗せ、大勢の人たちがすべらせながら運んだのでしよう。

石を切る

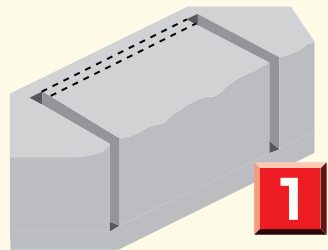
右の写真は、出雲市で発掘調査された大井谷石切場跡です。この石切場跡には、長方形や正方形の形をした一メートルから五〇センチ角の大きさのへこみがたくさん残されています。まるで月面に降り立って、クレーターを見ている錯覚をおこすかのような風景です。これが「キリヌキ技法」を使って石を切り出した跡です。宍道町にある来待石の石切場でも、機械化される昭和四〇年代まで、この技法で石を切り出していました。

キリヌキ技法とは、石山から効率よく石を切り出すために生み出されたテクニクです。まずマサカリでコの字形に溝を掘り込んで、石の周りを切り離します（1～2）。次に底を切り離すために、鉄製の矢（櫂）を打ち込みます（3～4）。最後にかなて（ク）を使って石を割り離します（5～6）。

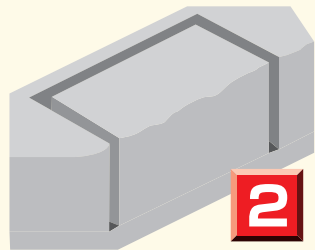
この作業は、たいへんな技術を要します。来待石のように軟らかい石では、矢を打ち込もうとすると左右に振れてしまうため、3のように深い溝を掘って、「矢」を置くというテクニクが必要です。



キリヌキの道具



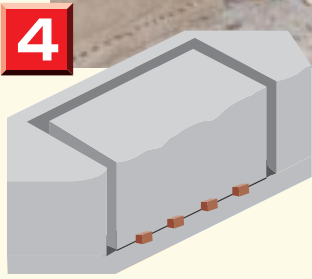
1 マサカリで幅約15cmの溝を垂直に掘る。溝が深くなると、柄の長いマサカリを使う



2 三方に溝を掘り込む。溝の深さは1.5m



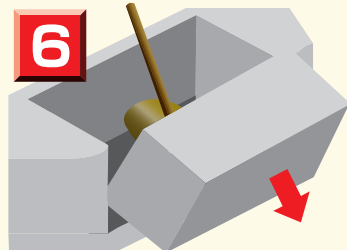
切る



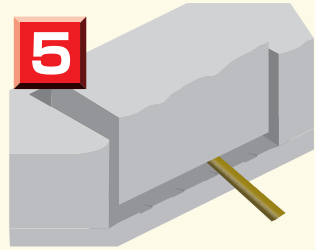
3 ゲンノウで矢（鉄でできたクサビ）を打ち込む



4 矢を打ち込む穴を掘る



5 石が動く。無事成功



6 かなてこで動かす

海

古墳時代、来待石で造られた石製品は、対岸にあたる宍道湖北岸まで運ばれ、松江市にある丹花庵古墳の石棺や北小原1号横穴墓（松江市）の閉塞石（墓穴のフタにする石）に使われています。これらの石棺は舟で湖を渡って運ばれたものと考えられますが、どのようにして運んだのか、詳しい方法はまだわかっていません。江戸時代になると、来待石は日本海を通じて全国に運ばれるようになります。来待石は「御止め石」と呼ばれ、他藩へ無許可で移出することを禁じられましたが、藩の許可を受けた来待石製の唐獅子（出雲唐獅子）は、北前船（東北・北陸の物資を西国に、西国の物資を東北・北陸に運ぶ船）を利用して全国に運ばれていきました。瀬戸内海では「石釣船」と呼ばれる船も発明され、大阪などへ石が運ばれていました。



山形県酒井市・日和山公園の出雲唐獅子



海を渡ってきた石塔（安国寺：松江市竹矢町）
松江の藩主であった京極忠高が、父・高次の菩提を弔うために立てた宝篋印塔。福井県で産出する笏谷石で造られたもので、「越前式荘厳」という越前地方独特の装飾が施されており、他地域から運ばれてきたことをよく示している。